

デンタルダイヤモンド／2011. 7月号

○実践歯科ライブラリー/レジン充填を再考する (貞光謙一郎 他)

*MI (ミニマルインターベンション) 治療を実践していく上で、感染した歯質のみを除去して修復を終えることのできるコンポジットレジン充填は非常に有用である。近年、接着技法の確立や物性的な向上により、その使用頻度も増すとともに治療方法にも変化が出てきている。本特集では、予後経過、充填手法、接着、充填材料の選択、研磨、光照射器の選択について、考察している。

○歯内治療の勘所とトラブルシューティング⑦/逆根管治療を成功させるために (井澤常泰)

*現在の根管治療はマイクロスコープ、Ni-Ti ファイル、CBCTなどを駆使したハイテク治療へと進歩したものの、根尖病変を伴う再根管治療の成功率は、低いと思われる。筆者は、失敗に終わった根管治療後の治療法として、歯根端切除術と同時に行われる逆根管治療を挙げ、マイクロスコープならびにCBCTを用いて、逆根充のための形成、充填の術式および充填材料を紹介している。

歯界展望／2011. 7月号

○特集／高齢者のインプラント治療 (吉竹賢祐 岸本裕充 小川秀典 成仁鶴)

*8020運動と謳われてはや20年が過ぎようとしている。しかしいまだ8010が現状と思われる。老後のQOLを高めるために、インプラント治療の活用的重要性もでてきた。そのためには、高齢者特有の全身的、局所的注意点の理解も重要になる。本特集では、注意点のみならず、ケースレポートとしてインプラントオーバーデンチャーの症例もリングと磁性アタッチメントが紹介されている。

今月も新連載がいくつかあるが、同時に興味深い連載が二つ始まった。同じ感染根管処置にたいして、デンタルX線写真の重要性を訴えているものと、歯科用コンビームCTの有効性を訴えているものだ。これも歯科界の現在の流れと思われる。読み比べていただきたい。

根尖病変を治癒に導く① 根管治療における診査・診断の重要性—デンタルX線写真を中心に—
CTが診断と治療方針を変える1 根管治療における有効性

ザ・クインテッセンス／2011. 7月号

○垂直性歯根破折の外科的診断 “Seeing is Knowing” (井澤 常泰)

*垂直性歯根破折の臨床症状は、咬合痛・歯肉腫脹などペリオあるいはエンド由来の病変と類似しており、診断が難しく、放置すると歯周組織の破壊が引き起こされ、抜歯に至るケースが多い。筆者は垂直性歯根破折の確定診断として破折線を見つけることであるとし、手術用顕微鏡や三次元的エックス線撮影等も有効であるが、確定できない場合は、診断的外科処置を実施することもあるとしている。多数のケースで詳細な術式や対応を例示し、根管治療の難症例でも大いに参考になると思われる。

日本歯科評論／2011. 7月号

○＜特集＞歯周外科BASIC—フラップしますか、しませんか？ (古市保志 内田剛也 他)

*歯周治療においてまず歯周基本治療をおこないます。そして改善が見られないとき歯周外科も選択肢の一つです。しかしそこまでも改善が見られないケースはありませんか。本特集はフラップをしてうまくいくケース、いかないケース、する必要のないケースなどエビデンスをもとに解説しています。明日からの臨床にすぐ役立つ内容になっています。

○舌接触補助床を広く臨床で活用するために—適応症の選択と作製方法 (菊谷 武)

*「舌接触補助床」を知っていますか？高齢者などにおいて、摂食・嚥下障害や構音障害を改善するために使われるもので、保険点数の算定もできます。これから増えると思われる舌接触補助床の適応症を解説し作製方法を詳説しています。在宅などされている先生必見！。